

芥川だより

発行日***2018年10月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624



***** 一部200円です *****
ひらきなおり



人生にはどうしようもない時がある。どうあがいても旨くない。誰かに助けてほしいのだが、相談する相手がみつからない。もうそうになったら、諦めて「どうなってもかまわない」と開き直るのである。こんなことを幾度か経験した。

そのほとんどが金が足りない都合がつかないことからことからくるものであった。この窮状はなかなか他人にも説明しがたく理解が得られないからヤケになってくるのだが、それでも何とかしなければいけないから、開き直りの心境になる。腹をくくる、というか度胸を決めるのである。こうなるまでは時間がかかるが、決めたら事は早い。

商売を始めた時に出資者の一人が株式会社の法人を希望されたので、当時の法律で決められた最低の1000万円の法人を作った。本当は、個人商店ぐらいでよかったのだが仕方がない。法人にすると決算処理をして税務署に毎年提出し、法人役員の改定もしなければならない。法人登記は司法書士にお願いし、決算は税理士にお願いした。

商売を始めてすぐに資本金を使い果たし、借入する目途もたわずに自転車操業状態で仕入れ先にも借金がどんどん膨れあがったが、どういうわけか取り付け騒ぎにはならず。いつかは、何とかするやろと皆さんが思っていたのだが、時間とともにその期待も薄れ「やっぱり、あいつはダメやわ」と思われるようになる。そうすると非常に辛い、もう毎日、朝から晩まで頭の中は金策のことばかりになる。とてもじゃないけど帳簿の事なんかは後回しになり、決算の時には困り果てるのである。

とことん困って税理士に払う金もなく途方に暮れた時、「そうや、税務署に行って相談しよう」と考えた。私には税務署は非常にハードルが高くて行ったこともなければ、電話をしたこともない所だが思い切って行った。行くと受け付けで2階の法人課を案内された。法人課に行き要件を言うと課長が来てテキパキとあっという間に処理してくれた。課長曰く「毎年来てください、ただもう少し整理をして…」わずか半時間余りで私の不安が消えた。こんなに簡単ならもっと早く来たらよかった。税理士さんに払ってきた金がバカバカしく思った。無知は何より怖い。

死をめぐるあれやこれ (49)

石川 吾郎

安倍政権は、半植民地国家を目指す

安倍政権の改造人事が明らかに、そのいかがわしさが鮮明になっている。犯罪疑惑とウソと暴言があふれた人事（居座り麻生、甘利・稲田の復活等々）。

トランプとの会談で、T A Gと聞き慣れぬ言葉の交渉だと言っていたが、トランプ側は日本側が恐れていたF T A（二国間交渉）の開始なのだと暴露した。安倍政権は米国に限りなく譲歩しながら、国民にウソをつき、メディアもそれを流している。

また政府が羽田に新しい航空路を増設の計画をしたが米軍が許可を出さない。それで五輪客誘致に限界、と一部で報道された（その後報道はピタリと止んだ）。実は東京の制空権は日本にはなく米軍が握って、米軍の許可なしには政府は何もできない。横田基地には日本側のチェックなしに米軍関係者が自由に日本に出入国を繰り返している。さらには米軍オスプレイが横田から東京の空を飛び回ることになっている。これが現実。

極めつけは、この秋の臨時国会に九条改変の改憲を上程するという。これが通れば自衛隊は米軍の指揮の下、米国の戦争に世界中どこまでも駆り出されることになる。

まさに半植民地国家ができあがってしまう。安倍政権は宗主国のご機嫌をとり、自分と仲間だけいい目をして、国民を虐げる植民地の傀儡政権に限りなく近い。これは沖縄に対する態度でもっと明瞭だ。知事選で辺野古ノアの民意が示されたにもかかわらず「辺野古移設は唯一の解決策と（裏面に続く）」

の考え方に変わりはない」とするのはまさにこれだろう。
これでいいのか？

◆制空権問題は、矢部 宏治『知ってはいけない 隠された日本支配の構造』(講談社)がお勧め。日本は憲法や国会より日米地位協定と日米合同委員会によって支配されていることが分かる。昨年九月号の本誌(一一八号)で紹介記事があるので、こちらも参照を。

芥川だより一四二号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 55	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 5	祖蔵哲	3
大峰奥駆道 19	下村嘉明	7
大人の今昔物語 49	石川吾郎	8
B級サラリーマン渡世譚 63	明石幸次郎	8
オクラの山たより 25	因了生	9
邪馬台国と火の国・補足 4	満田正賢	13
編集後記	嘉	15
ふみの道草 2	山椒魚	16
俳句	土田裕 影山武司	16

素老人☆よもだ帳 (55)

坂本 一光

◆母を送る言葉

前回は父を送る言葉であった。今回は母を送る言葉である。まことに個人的なことでもあり、簡潔にしたい。

母を送ったのは十年前である。父は七十九歳で逝ったが、母の行年は九十五歳であった。以下は、四十九日の法要を済ませた報告である。

拝啓

母は本年一月六日、行年九十五歳で逝きました。大正、昭和、平成の世を一途に、ただひたすらに生きた人でした。

意地悪と卑下とをこの人に遺伝して一族ひそかに拾い合えるかも

天国へ行くまで

母は地獄の草筆り続け

前者は土屋文明の短歌、後者は橋本夢道の俳句です。母の死に対する直視と悼みがこのようにあることに、かつて驚いた記憶がよみがえりました。

二十二年前に亡くした父と、先頃亡くした母とに私が遺伝したものは何か。父の死の精神性と母の死の身体性を感じながら、わが存在と人

生を思いもかけなかった目で見ています。

大事にはもの言わぬ父と
小事にもうるたえる母に
遺伝して我あり

わが父と母身罷れば
わが内の
明治大正遙かになりぬ

本日、四十九日の法要を済ませました。ご報告に合わせ、母への告別に際し頂きましたお心遣いにあらかじめお礼を申し上げます。ありがとうございました。

合掌

二〇〇八年二月二十三日

母の死顔に会いに行く

伊予灘は遠く霞めり

母の死顔に会う

あまりに暖かき日です

母の死顔に別れる

ふるさとの山は一変してあり

素老人はかつて、ある中学校の校歌が草野心平の作詞、山本直純の作曲であることを知り大変驚いたことがある。その草野心平には天平という弟がいた。心平も天平とともに詩人である。天平は、一冊の詩集『ひとつの道』を残して行年四

十三歳で亡くなった。その中にこんな詩がある。

宇宙の中の一つの点

草野天平

人は死んでゆく
また生まれ
また働いて
死んでゆく
やがて自分も死ぬだろう
何も悲しむことはない
力むこともない
ただ此処に
ぼつんといればいいのだ

天平は、自らの死の十年前に最初の妻を亡くしている。次は、『妻の死』と題する詩である。

妻の死

草野天平

糸巻きの糸は切るところで切り
光った針が
並んで針刺に刺してある
そばに
小さなにつぼんの袂が
そつとねかせてあった
妻の針箱をあけて見たとき
涙がながれた

『糸巻きの糸は切るところで切る』―そ

哲学翁の時事放談(5)

祖蔵 哲

れは、未だ止む気配なしの詐欺であろうとなかろうと、『オレオレ』と言ってしまふ男のずるさ丸出しとは異質な、凜とした精神の発現である。余談ではあるが、素老人はそれを見て涙を流さないような奴を友にしない。

死は誰にでも、またどこにでもあることであるが、自分と深くつながる者の死は自分の来し方に密接にかかわる。だから人は、そういう人の死を歌に詠み、俳句に詠み、詩にも詠むのだろう。詠むことは記憶することである。その人の死を記憶し、同時にその人とかかわる自身を記憶する作業は、人間の、終わることのない永遠の営みであるように思う。(かたちは心であり、心はかたちになる)

■大分の素老人

「正統の哲学」

安倍、トランプ政権の正統性とは

相変わらず台風、地震など自然異常変動の影響が大きく世界規模で日常生活を脅かしている。前号からもテーマとしているが、この自然変動が人間の思考、行動にも大きな変化を与えているようだ。

それは政治の世界に顕著に現れてきている。日本ではあれほどの「私権」と「スキャンダル」に汚れた「安倍政権」が党派内での首班選挙であれ、多くの国民の支持により再選された。その選択の理由で多いのは「高株価による好景気」というものだ。経済の良し悪しを「株式」という一つの経済指標だけで判断するという単純思考から、将来を凶る政治が決定されている。「今が良ければ将来はどうでもよい」という「現世利益」的な考えは、何かしら「自然の予期せぬ変動」を予知しているのか、いよいよ「末法時代」になり「千年王国」が近づいてきたのか不安な状況である。なお、「政治政策」と「株価」の関係はそのように単純なものではない。二〇〇八年九月の株価暴落はアメリカのリーマンショックと呼ばれているが、この現象の原因は政策無縁、自由放任経済の結果である。その時の日本の政権は現在と同じ自由民主党の第一次安倍内閣の次の福田、麻生内閣である。

この時代に最悪の景気を経験した国民が選んだのが「政権交代」である。「民主党政権」は鳩山、菅、野田と続いたが思うような景気回復ができなかったと思われる。しかし、それはアメリカ経済の景気回復が遅れたからであって日本の経済政策のまずさからではない。本来は政権交代を可能にするために新しく採用した「小選挙区制」はこのとき逆に機能し、一強政治の補強の役割になった。

不幸なことに現在もこれが続いている。国民は結果的に最悪な選挙制度の選択としたということである。周知のように「小選挙区制度」は死票を多く出し、少数政党の意見を切り捨てる。このモデルは多数党優先で米国式二大政党政治を目指すものであったはずである。さらにこの時に印象形成されたのは「好景気」||「株価高」||「良い政治」という単純思考である。揺れ戻した安倍政権はこのことをよく理解して強行手段をとった。それは低金利政策と増税である。これはいうまでもなく弱者から強者へ資金を移動し、その資金を株式市場に投入し、不自然に株価をつりあげることだ。リスクが多く非常に危険だといつて世界の他のどの国も避けている公的年金資金を株式に大量投入しているのは異状な国家主導の金融政策の一端である。そのような実態経済を反映していないマネーゲームとなっている株式市場の動向を政治選択評価の基準にしている国民の思考の危うさの代

償はこれもまた「弱者」が支払うことになる。これはもちろん日本だけではない米国でもトランプ政権の中間選挙が近づいてきている。同じような構造で政治が行われていると見る。

「この国民にしてこの政府あり」(トーマス・カーライル)一九世紀のイギリスで流行った言葉である。政治家を愚かと批判することは同時にそれを選んだ自分達も愚かであるということを告白しているというのであろうか。さて、その国民はどのような基準で政権を選ぶのだろうか。

1、「正しさ」とは人々は何を基準に政権を選ぶのか

先月号では「社会契約論」として、個人がその権利をいったん国家に預けるときの制度としての「民主主義」を話した。その民主主義は個々人の意見が正しく反映していなければいけないが、そうでなくともいったん決まればそれに従わなければならない。そうであればこそ人は誰でも自分の権利を預ける政治政権にはその「正しさ」を求める。この正しさは「正当性」と呼ばれる。しかし、正しいというものは主観的、個人的である。個人の考え方、価値観はばらばらで共通性、つまり「客観性」に乏しい。そこで次の段階の「正しさ」を求めるのであるがそれは客観的「正しさ」の方向に向かう。より自分の考え「主観」に近く、なおかつ多くの他の人からもそう思われているだ



ろうという「客観性」をもつ「政策理念」を持つ政党である。しかし、その前にその政党が「正しい手続き」で存在しているのかが問われる。この「正しい理念」と「正しい手続き」を兼ね備えてものが「正統」と呼ばれる概念である。だから、自分と意見が違う政党政権であっても、その政権の成立手続きが正しければ、いやいやながらも従う。しかし、正しい理念だけがあってもその権力成立手続きに不備があると誰もそれを認めない。混乱の時代にあり多数の人々がよりどころにするのがこの「正統」であろう。しかし、現代の政治的混乱の原因もまたこの「正統」にある。一方の正統「手続きの正しさ」だけが重視され、いったん政権が権力をもつとやりたい放題、「政策理念」からは全く離れた政治がなされる。これも先月号で話した「戦争好きの民主主義」になる。

2. 哲学的概念が現実をつくる。

さて、政治的「正統」は「手続きの正当」と「理念の正当」という「二つの概念」で成り立つと言った。このように私たちは普段は気が付いていないが、この「正統という概念」にしたがって「政権を選んでいく」のである。この現象はまさしく「概念」が「現実」を作っているといっても差し支えない。

一八世紀ドイツの哲学者ヘーゲルも同じように考えた。かれは「法の哲学」の

序文で、『理性的であるものこそ現実的であり、現実的であるものこそ理性的である』と書いている。どういうことかというところ、ヘーゲルにとつて、私たちのいう現実的で具体的なものは却って抽象的なものであり、真に具体的、現実的なものが理性的なものとしての概念であったからだ。ヘーゲルは古代ギリシャのプラトンの「イデア論」の、また「実在論」の近代の復興者であった。プラトンは天にある「イデア」が真の世界であり、本当の世界であり、地上の私たちの世界、具体的・個物の世界は真の世界でなく、ニセモノの世界と言った。中世になると、その「イデア」は神に言い換えられ、その神が世界を、人間を創造したとされ、人間はその神の被造物と言われた。天に天国があり、そこが本当の世界で、地上の世界は「仮の宿」であり、人は良い行ないをして天国に生まれ変わると言われた。

このような世界観は、「現実」にどっぷり漬かり切っている私たちにとつては、ひっくり返った世界、頭で歩いている「哲学者」の世界と思っている。具体的な物事よりも、つまり感覚され、見たり触れたりできるものよりも、理性的なもの、つまり概念、「哲学」の方が現実だといっているヘーゲルを私たちは本末転倒していると感じる。しかし、先の政権選択での正統概念の話でわかるように、本当は「概念」により「現実」が成り立っている

のではなからうか。少し考えてみれば分かる。日常、私たちはお金をつかって生活を営んでいる。この「お金」というものは、それ自体で生活はできない。つまりお金はそれ自体食えることができないのだ。お金には誰とでも食物に「交換」できるという「概念」があるから私たちは生活している。そのお金という「概念」が媒介するさらに「市場」という「世界概念」が「現実」を作り出しているのである。そして、社会とか国家というのも概念で、具体的に目に見えるものではないが、個人よりも、社会とか国家の方が、本当の实在じゃないか、と思うことがある。

3. 概念としての正統とは何か

さて「正統」とは何かに再び戻ろう。「正統」は「せいとう」と読む場合と「しようとう」と読む場合があり、それぞれ概念が異なる。ところである「概念」を説明するのにその属する「類概念」全体を知ることが重要である。その最もわかりやすい方法が「反対概念」を挙げることである。例えば「白」という概念を知りたければその対象の「黒」とい概念を挙げれば「色」という「類」中の「白」という「概念」がはつきりとする。この方法に従うと「せいとう」といしての正統の反対概念は「異端」である。「正統―異端」といえば、言うまでもなく「宗教的概念」ということがわかってくる。

その前にあまりなじみのない「しようとう」としての正統概念を説明しておこう。その反対概念は「閏当(じゅんとう)」。聞きなれない言葉であるが「閏(うるう)年」というのに関係があるらしい。歴史的には正閏論として、漢文化圏において、王位の正統性がどの王朝にあったかについての議論がある。ここでの「閏」は「うるう」ではなく「異端」という意味であり、「平年ではない余り物」から派生して「正統ではない余り物」も意味するようになった。閏日や閏月は一年のうちではあるが、閏月は一月から十二月までの正規の月と区別して「閏八月」のように呼ばれるため、それに擬えた語である。日本では同時に二人の天皇が存在した南北朝時代について、南朝(大覚寺派)と北朝(持明院派)のどちらを正統とするかという議論が盛んにおこなわれた南北正閏論争がある。また、朱子学の正閏の基準として立てられた「篡臣、賊后、夷狄は正統とせず」(謀反人、女性、異民族は正統としない)という議論は、山崎闇斎ら日本の儒学者によって、「それならば中国史上の創業の君主はみな謀反人ではないか、神武天皇以来万世一系の日本に中国は政権の正統性で遠く及ばない」という議論に結び付けられ、尊王思想や皇国史観につながっていくことになった経緯もある。

4. 宗教的正統と「正統」と「異端」

一方、宗教的概念を基とする「正統」

の反対概念は「異端」である。「正統―異端」という構造で思い浮かべるのがキリスト教異端論争である。それほど左様に宗教と言えキリスト教のことである。

それでも、我々日本人は仏教も宗教であると思ってしまう。しかし、世界基準では仏教は宗教でないのである。もちろん神道も。その証拠に国際的には仏教は

「Buddhism」(仏教思想)と分類され「イズム」、マルキズム、アナキズムなどと同じ一思想概念である。では国際基準である宗教学での「宗教概念とは何なのか。それは「啓示」とその「経典」である。

「啓示」とは人間を含めた全世界を創造した超越者(神)がそれ自身を自然の中で現していることであり、そして「経典」とはその事を文字として表したものである。これが世界基準の宗教の定義である。

ブツダは世界の創造者ではないし、啓示としての「経典」は伝承されていない。仏典は多くあるが「聖書」のような唯一性はない。様々な解釈の仏典があるだけである。この基準からいえば、これらすらない神道は思想でもなく、ただの昔話である。西欧の宗教はこれほど理性的概念が必要なのである。

それでは「異端」とは何か。異端とは「正統」を批判するところから生まれた概念である。本来、世界全てが同一概念であれば、それは概念化されないし、気がつかない。主観⇨客観の世界である。

対立概念があるから自分自身が客観的に

認識されるのである。「異端」の批判対象は「正統」と同じ経典である。批判される側の「正統」はこの時点ではもちろん多数派である。多数を占めるためにはどうしてもある一定の多様を受け入れなければならぬ。それは俗化ともつながる。この世俗化を批判する「異端」は経典の原点復帰を志向する。それは原理主義、ラディカリズム、理想主義、主観主義的になる。

これに対する「正統」は世俗の不完全さ、多数、客観を前提として成り立っているため、一定の不合理さを認めざるを得ない。その埋め合わせとして「教化」つまり「教育」「啓蒙」に努める。しかし、「聖と俗」は簡単には一体にはならない。

そこで正統はエリートと一般を区別する「二元主義」をとるのである。

5、二つの「正統」
政治学の分野に「正統と異端」の概念を適応しようとしたのが丸山眞男である。

「正統異端」の構造は宗教の場合と同じであるが彼は正統を「政治権力としての正統⇨L正統」と「宗教権威的正統⇨O正統」という二つに分け、場合によってはそれぞれを「異端」と対立させている。

元来「正統」という言葉は西欧の訳語である。概念としての「正統」は元来西欧起源のものである。一つは「Legitimacy」であり「レギュラー合法」という語源でも類推できるように政治権力的、世俗的

権威(L正統)のことである。他方の概念は「Orthodox」。この語源はギリシア語の「オルトドクシア」であり「オルト(正しい)ドクサ(考え)」という意味(O正統)になる。この概念は先ほどから説明している通り非常に宗教的なものである。というのはこの「オーソドック」そのものがキリスト教の「正統」を争うことから始まったからである。

話は少し世界歴史の方向に逸れるが、キリスト教がローマ帝国の公認宗教になったのは三一三年コンスタンチヌス帝のミラノ勅令を経て、二九二年テオドシウス帝はこれを国教にした。しかしそもそも紀元前一世紀か後二世紀まで続いた五賢帝時代のパックスロマーナという最繁栄期から時代を経てローマ帝国そのものが衰退期に入っていた。異教であるキリスト教を受けざるを得なかったというのもそういう事情である。以後ゲルマン族の侵入などを契機として、もともと分割統治されていたローマ帝国は東西に分裂した。東方は東ローマ帝国として一五世紀まで続いた。中世の東ローマ帝国は、後世ビザンティン帝国と呼ばれるが、正式な国号は「ローマ帝国」のままであった。この国は古代末期のローマ帝国の体制を受け継いでいたが、完全なキリスト教国であり、また徐々にギリシア的性格を強めていった。

一方の西方の西ローマ帝国の皇帝政権はゲルマン人の侵入に耐え切れず、ロー

マ帝国の中心イタリア半島の維持さえおぼつかなくなった末、四七六年ゲルマン人の傭兵隊長オドアケルによって西方皇帝が廃位され西方正帝の地位が消滅した。旧西ローマ帝国の版図であった領域に成立したゲルマン系諸王国の多くは、消滅した西の皇帝に替わって、全ローマ帝国の皇帝となったが、実は彼らも東の皇帝の宗主権を仰ぎ、ローマ皇帝に任命された西ローマ帝国の地方長官として統治を行ったのである。したがって、現代人的認識では西方正帝の消滅後にローマ帝国とは別のゲルマン系諸王国が誕生したかのように見える西欧の地も、同時代人的認識としては依然として「ローマ帝国」を国号とする西ローマ帝国のままであり、ゲルマン系諸王はローマ帝国の官人としてローマ帝国の印璽を用い、住民達もまた自分たちのことを単に「ローマ人」と呼び続けていたのである。そしてローマ帝国の国教であったキリスト教も東西に分裂していく。しかし、この分裂は政治的、地理的な分裂ではない。それは「経典」解釈をめぐる「正しさ」の分裂である。最大の論争が「三位一体」問題であるが、この問題を巡って東西がお互いに「正統」「異端」を争った。しかしこの議論は、礼拝方式、教会組織の違いなども伴い東西の亀裂を拡大した。一一世紀初頭、やがて東西ローマ帝国教会は相互破門という形で分裂を決定的なものにした。東ローマの教会は自らを「オーソドック

ス」と呼び、西ローマの教会は「カソリック」と名乗った。カソリックとはギリシヤ語で一般的という意味の「カトリコス」からきており、「普遍」を意味する場合が多い。

現在のキリスト教世界ではカソリック教会がローマ教会と呼ばれ主流であるよにみられるが、その理由は政治的な影響が大きいように思われる。なぜなら、歴史には先に見たように明らかに東ローマ帝国に残ったキリスト教が文字通り「正統」であろう。しかし、政治世界での権威は別の力学で動いてしる。東方正教会はギリシヤ、ロシアに拡大したが、両国とも世界大戦により国土が荒廃した。特にロシアでは革命以後、宗教は否定され弱体化を余技なくされた。相対的に力を増したのが西側の宗教「ローマ・カソリック」である。このように「L正統」と「O正統」は「異端」という分裂を契機にして、相互に補充しあいその「正統性」を維持しているのである。

6. 政治的正統と保守

さて、哲学から政治学、歴史の話へ、話題が大きく揺れ動き焦点が定まらなくなり読者には大変迷惑をかけている。そこで最後にテーマに戻ろう。安倍首相やトランプ大統領の政治のどこに「正統」があるかである。

まず、日本の政治である。「正統」という語に関連して「保守本流」という政治

用語がその「しようとう・正統」としてよく呼ばれる。すなわち我こそが「保守」を「正しく」引き継いでいるという正論としての「正統」である。日本政治における「保守」とは何を政治の始まりにするかによって異なる。しかし常識的には近代政治としては「明治政府」を始まりとするのが常識というのであろう。将軍の政治である「江戸時代」や天皇貴族政治である「平安時代」、ましてやその存在さえ疑わしい「古事記」の世界「神代」までさかのぼるのは「意気込み」としては理解できるが現実の政治技術としては到底受け入れられるものではない。なぜなら近代政治とは西欧概念そのものであるからである。そういった意味での日本政治の源流は「大日本帝国」ということになる。まさしく安倍首相はこの「大日本帝国」を自らの「保守の原点」にしていることはかれの言動や行動であきらかである。しかし、「正統」という概念から考

えてこの「大日本帝国」が現在、「正しく」その概念を受け継いでいるのであろうか。まず、「正統」の「手続き」面である。これは完全に断絶している。「大日本帝国」は国民の総意で誕生したのではない。明治政権に現在の民主主義という概念も実質もない。しかし、現在の日本国憲法は国民主体であり「民主主義」である。ここに大きな断絶があり「大日本帝国」との継続性は皆無である。それでは本来の「正統」はどうであろうか。それは安倍

首相がお手本とする「叔父・岸伸介」である。ご存じのように岸は大日本帝国、戦時期の東条内閣の閣僚であった。敗戦後は戦犯として公職追放されたが東西冷戦の機に奇跡の復活を果たした。それは一方の超保守派の吉田茂の牽制としての役割である。両者に共通するのは天皇制に対する連合国からの「民主主義」を、自らの保身のために「いやいや」受け入れたという点にある。それが現行憲法であるが、その中の九条「戦争放棄」が現在、安倍政権ではテーマとなつていいるが、そもそもは「日本国憲法」すら受け入れがたいのが彼の「本音」であり、かれの「保守」である。しかし、何度も言うようにここに「正統性」はない。トランプ政権も同じようなことが言える。国際的「客観的」基準から外れた自国中心「主観的」に「正統」の根拠はない。あるとしたら主観的としての「異端」の機能である。

さて、最後に「正統」という「正しい」概念での政治の在り方について少し話してみたい。いままで見てきたように、歴史には政治的にも宗教的にも「正統」というものは「世俗的」「多樣的」「客観的」なものである。それは「異端」である「普遍」を取り込んできた。「普遍」とは「いつでも、どこでも、だれにでも」という「時代、国、人類」の違いを超えて通用する価値である。これを「理念」すなわち「経典」とするもののみが「真

の正統」であろう。この意味からは「正統」はその批判者である「異端」の存在によってこそ自らをより「普遍化」し「正統化」するものである。異端者は正しくその「経典」を批判しなくてはならないし、そしてより広範にその理解を得なければならぬ。また、「正統」はこの異端を権力によりのみ排除してはならない。なぜなら異端こそ自らの立脚地であるからである。私たちはこの真の正統「概念」を正しく考え、選択しなければならぬ。「概念」が「現実」を作るからである。



下村嘉明

奥駈道を計画の半分も行けず、同行してくれた高ちゃんに申し訳なかった。忙しい中で私の誘いを聞いてくれた彼に誠心感謝しなければならなかったのだが私の心は、言い訳ができそうな何かを探していた。

私の性分には、自分でも分かっているのだが、薄汚いええかつこしいの性格が見え隠れする恥ずかしいものがある。本当の自分を直視できない弱さを常に秘めている。この傾向をごまかす為に、あれやこれやとモノを考えているといえるかもしれない。

知り合いの俳人から、ある時間聞いた。私が俳句の推敲について、たずねた時である。「俳句はひらめきでさっと作ったらいいのか、幾度も練り直し推敲を重ねたほうがいいのか」という問いに対して俳人は、

「俳句を作る時には、いろいろと手直しして完成するが、素人の作品からは、その手直しがキズとなって見える。そのキズを見せないようにするのが技なのよ」その時に、ハタと気づいた。そうなのか。やっぱり、みんな苦労しているんだ。大先生といわれるこの人も、苦労して作ったキズを残さないように、いかにもサツとひらめきと鋭い観察力でもって作ったかのように俳句を仕上げているんだ。確

かに一瞬にしてできる句もあるだろうが、多くは幾度となく推敲を重ねた句なんだと考えたのである。

しかし、その苦労を読者に押し付けてはいけない。出来るだけ句の世界だけに感じ取って味わってほしいから、キズと感じられる部分をうまく隠してしまう技を磨いておられるのだ。

人の生きざまも、これによく似ている。確かに、一人の人生には、多くのキズがある。他人に知られたくない、見せたくない事がある。正直に自分をさらけ出すのもいいが、何もなかったように、そつとオブラートで包み綺麗な人生を見せるのも大事なのだと考えた。

人に感づかれぬように、うまく自分の人生のキズを隠す技とは、いかなるものか？ これは、なかなか難しい問いだ。これまで生きてきた中で、出会った人たちを振り返り考えると、それとなく思い当たる人がいる。

老いた絵描きの女性と話をする時、彼女がいつも言うセリフは「みんな分かかってないのよ。一本の線を描くことがどんなに難しい事かを。画廊の人たちは簡単に言うけど、この絵はええ、と言わせるために、どれだけ苦労しているかを分かっている」

永年にわたり絵だけで食ってきたプロの絵かきさんでも、未だ悶々とした胸中なのだと驚いた。

世間で評価が高い俳人や絵かきでも、

その胸中は人知れず苦労をされていることを知るのである。確かに人より優れた才能や感性があっても、永年にわたり制作し続ける難しさ。

どんなに苦労しても、舞台に立てばその苦労を見せてはいけない。一流と思える作家たちは、その作品の中に涙ぐましい努力を見る人に感じさせてはいけない。この覚悟が彼女らを一流にさせているのだと私は考えた。

私はというと、そんなことを考えもせずに、場当たりに振舞っているだけである。他人に対する配慮もうわべだけで深く考えてはいない。今回の山登りでも先輩ずらをして後輩の高ちゃんを利用したに過ぎない。ああ、何という人間だと自分に愛想がつく始末だ。

しかし、敗退した今回の言い訳には、次には必ず踏破するという文句しか浮かばなかった。確かに、山に対する気構えや体力など改めるべき点は多々あるのだが、それらを超えていく想いを次につなげていくには、もう一度挑戦するという考えであった。

諦めてもうやらないという考えもあるのだが、情けなくて考えもしたくない。これが山岳部の先輩としてのプライドであり自分のプライドでもあった。まあ、考えれば些細な単純な考えである。

決めた以上やり通す、これほど簡単な逃げ道はない。この方便で過去の失敗を消し更地の世界に変えてしまう魂胆が見

え隠れする。失敗した事への根本的な洞察を回避し、目先への問題にすることにより自分の迷いや後悔を一気に消し去る。すべてを過去の事にしてしまおうのである。一旦、過去のことにすると、閉じられてしまい。そのことに対する問いかけは、不問になってしまう。

ああ、なんと身勝手な逃げ口上なのか。こんなことを繰り返してきてきたのが私の人生そのものだと思えてきた。しかし、それほど嫌気がさそうが、他に道がなければ行くしかない。

こんな訳もないことを考えながら、さて次の奥駈道をどうして歩くか考えた。これまで通りではダメだ。もつと慎重に計画的にやらないと、到底歩き通せない。この峰々は侮れない山の奥深さ、変わりやすい天気、水場の不安定等を持つ摩訶不思議な峰々なのだ。多くの修験者がひきつける魅力とは、その困難と表裏一体なのにちがいない、と私なりに悟った。それなら、一回といわず毎年奥駈道を歩くぐらいの覚悟がないと、この山の魅力はわからないと思うと、ますます、気合が入ってきた。



大人の今昔物語 (49)

石川 吾郎

今回は、中国・漢の武帝の時代の天の川伝説です。教科書に出ない度は一／五。

漢の武帝、張騫をもつて天河の水源を求めた話し (巻第十 第四)

今は昔、漢の武帝の治世に張騫という人がいた。皇帝はこの人を召して言うに、「天の河の水源を調査し参れ」と命令し派遣した。

張騫は、皇帝の命令を拝領し筏に乗り、天の河の水源を求めてさかのぼっていった。遙かある場所に行き着いた。そこは未知の場所であった。住む人々は漢の人々とは全く異なった風体で、織機を数多く立てて機を織っている。一人の老人が牛を引いてやってきたので、張騫は尋ねる。「ここは何という土地ですかな」。「ここは天の河という所です」と答える。張騫はまた「この人々は何という人々ですか」と問えば、「我らは、織女と牽牛というものです。そういうおまえさまはどなたですかの」と問う。

張騫「私は張騫と申します。天の河の水源を調査せよとの皇帝の命を拝領し、来ているのでござる」と答える。すると老人は「これこそ、天の河の源です。もうお帰りなされい」という。これを聞いて張騫は、帰途についた。

張騫帰り着いて武帝に奏上するに「天の河の水源を求めて参りました。しかし

かの場所にたどり着きましたれば、織女が機を織り、牽牛は牛を引いてここが天の河の水源と申しますゆえ、そのから戻りましたところでございます。その場所の様は、我が漢帝国とは似ても似つかぬものでございました」と報告する。

さて、張騫がまだ帰り着かぬ前に、さる天文博士が七月七日、「今日、天の河のほとりに、見知らぬ星が出現いたしました」と武帝に奏上をした。

武帝はこれをお聞きになり、不審に思し召したが、「張騫のこの報告を聞いて、天文博士が見知らぬ星が出現をしたと申したのは、張騫が行ったのが見えたのだったのだ。実際に張騫は行ったのだったんだ」と、得心をされたことだ。

というわけで、天の河は天に流れているものではあるが、天に昇るわけでない人も、このように見えるものなのだ。これを思慮するに、かの張騫も、ただ人間ではなく、神仏の化身ではないのかと人々は疑ったということだ。

《コメント》

ここで出てくる「天の河」は、空の天の川を指すと同時に、現実の黄河を指しています。(河という字はそもそも黄河を指し、その角張ったところは黄河が直角に曲がるさまを表しているということです)

張騫は漢の時代の実在の人物で、武帝の命を受け、匈奴に対する同盟を説くために西域へと赴き、漢に西域の情報をもた

らしました。『史記』には、西域から帰国後に、黄河をさかのぼり、その水源を突き止めたという記述があり、後世に「張騫乗槎説話」といって、張騫が筏に乗って黄河をさかのぼる姿が絵画や詩歌の題材として、伝えられてきているといえます。

空の上の天の川と地上の黄河とを対応させ、意識的に同一視をする思考が、面白く興味を引きます。

尚、京都の祇園祭の「保昌山」の胴懸に、この張騫が登場しているとのことです。

B級サラリーマン渡世譚 (63)

明石 幸次郎

担当者の役割 (韓国編その16)

ジャン・ギャバンに似たH川との話を切り上げて、自席に戻る前にK村に

「H川さんと話をしてきました。昨夜の事など全然覚えておられない様子でした。今日は絡まらずに、韓国の話をお聞きして、参考になりました。ご助言、有難うございました」とK村に頭を下げ、礼を言った。

席に座ると早速、フライトと訪韓スケジュールと目的を金さんとM商事にテレックスで連絡しようと、隣のN川にやり方を聞いたすると自分の機の引き出しに保管している所定の用紙を手渡し、原稿の書き方を懇切丁寧に教えてくれた。念のために明石は、フライトと二泊三日のスケジュールなど書いた原稿をN川にチェックしてもらい、急ぎで連絡したかったので、本館の一階の総務部の隣にあるテレックス室に原稿を持って行った。テレックス室には転勤の挨拶に来ていたので入りやすく、直ぐに主任のS井の所に行つて頭を下げながら「S井さん、悪いけど、今週末曜日から韓国に出張する事になったんで、この内容で、韓国金商事とM商事東京とソウルにテレックスを直ぐに打つて欲しいねん」と原稿を渡すと「エエ、二日程前に転勤の挨拶に来たばかりやのに！明石さん、大丈夫かいなあ〜もう、出張なん。パスポート、よう持つてたなあ〜。分かった、S木さん、明石さんがお隣の韓国に出張やて、これ、直ぐにテレックスで連絡して上げて！」

とS木を呼んで原稿を手渡した。S木は「それは、それは、転動してきたばかりなのに！」「苦勞さんですね。韓国は軍事政権やし、反日感情が強く、恐い国と違ふのん。何か変なことしたら帰ってこられへんよ！もつと、良い国に行かしてもらつたら？」とそんなこと、自分で決められないし、変な事なんか出来ません！仕事で行くんですよ」と答ると、大口のS井が笑いながら「S木さん、意外とこの明石さん、期待されてるんと違ふうまあ例えたら、阪神みたいな存在やなあ！」「何やそれどういう意味？期待されてる割に弱い、万年Bクラスという意味かいなあ」と言ふと、この部署の女性全責が阪神タイガーズの熱狂的ファンなので、タイプを熱心に叩いていた他の三人も手を休め、明石の方を見て「何、阪神がどないしたの？明石さん甲子園の切符手に入れてくれたん？」と言われたので「違ふ違ふ、阪神の話をよくしに来る国内営業のなんとかさんと一緒にせんといてね。今日は、仕事のテレックスを頼みにきたら、なぜか、この私の存在を阪神に例えられて、万年Bクラスと言ふか、B級サラーマンのようにS井主任から言われたんや！」と説明すると、S井が「ええねえアンタも阪神みたいに一〇年に一度優勝したら、ええやん。巨人みたいに毎年優勝を期待されてるのと違ふやん。会社で一〇年に一度、周りにあつと言わすような、大きな注文を取つて来たら、ええのと違ふうそれに阪神はファンが多いよー。これから、明石さんも力が無くてもお客さんから好かれ、ファンになつてもらたら良いやん！」と助言されてしまった。「何や

それ！上手いこと言うなあ〜長いこと、会社で禄を食んでる人は、言う事が違ふわー」と言ふと大きな口を開けて、笑いながら「はよ出て行きなさい！どうせ、出張の準備、まだしてないんやろ？」と追い出されそうになつたので「それでは、連絡、直ぐに頼みますよ！帰ります」と頭を下げて出て行つた。

良かった、あのまま、話題が阪神に移り、タイガーズ談義を五人相手にやっていたら、昼になつてしまふので、ほつとして、新館四階の自席に戻つてきた。

席に着くと、隣のN川が「明石さん、早かつたですね。女性陣に捕まつて、昼までに帰つて来れないかと心配してたんですよ。もし遅くなるようでしたら、助け舟の電話をしようかと思つていましたよ」「有難う。良く分かつてくれてるね。あそここの、S井組五人女子軍団は、全責が虎キチで、阪神の話をやり出すと、ドラ息子が可愛い親バカの母親みたいなもので、今年は頑張つて応援すれば、優勝出来ると信じて、せつせと旗振りながら甲子園に通い、秋になり優勝出来なかつたら、自分等の応援が足りなかつた、それを毎年一途に思つている。優勝は無理や、無理とドラ虎に期待してもアカン！と一事でも言つたら、ドラ息子も貶された母親みたいに何で、ウチの子が駄目やの？と真剣に噛み付いてくるよ！仕事も同じ様に真剣にやれよ！と言いたいけど」と笑いながら言つていると「おーい！ちよつと早いけど、飯食いに行こか？」とピンクシャツのK村から声が掛かり、その後部下のK久保がこちらを向いて笑いながらK村について出口に歩いて行つた。

それを見て、N川は立ち上がり「M居さん早いですが、明石さんと外食して来ますが、一緒にどうですか？」と言ふと「いいわ、断るわ！どうせ、K村と一緒にやろ？」と返事が来たので、「明石さん、行きましょか！」と言われたので明石は「まだ早いがー。良いの？」と立ち上がり「すみません。早いです」とM居に頭を下げて、N川と出口に向かい「N川君、エエんか？まだ、昼まで、三〇分あるよ？」と言ふと「良いです、良いです。輸出部は、これで許されているんです」と分かつた様で、分らないような答えが返つて来たが、N川に従い出口のドアを開けたら、先に出た二人がエレベーターのボタンを押しながら待つていた。

直ぐにエレベーターが上から下りて来たので四人は乗つて、一階で下りて、広いロビーから、玄関に向かつた。途中で受付があり、美人二人にK村は声を掛け「市場に、こいつ等と飯食いに行つてくるわ」と言ふと、美人二人は、にっこり笑つて「行つてらっしゃいませ」とお客に愛想良く言う様に言つて、頭を下げた。玄関を出ると明石はN川に「何で、受付嬢はK村さんに愛想を言うんや。我々は会社の規則を破つて早飯を食べに行くのにな？」と言ふと「私も分かりません！K村さんは、特別です。受付、保安では、役員待遇ですよ」と前に歩いているK村を指して言つた。明石は、容姿、背丈が雑誌のモデルの様で、その上押し強そうなK村を、我社に今まで出合つた社員中では、考えられない面白い、型破りの個性派社員が存在しているのかと驚きながら、木津市場のうどん屋に早速でついて行つた。

オクラの山たより (25)

困生

殺人事件やら無実の夫を救おうとする妻の訴えやら何かと殺伐とした内容が続いたので今回は気楽な内容とします。決して手を抜こうという気持ちはないのですが、肩の力はウンと抜けているはず。軽い気分ですんでいただけなら良いと筆者は希望します。

さて、極めつきの秀才・才媛ならいざ知らず、親や教師から「勉強しろ」と説教された記憶のある方は多いかと察します。そうした「お説教」の決まり文句は「若いときは二度とは来ない。時間をムダにしてどうする。今こそ勉強するべき時なのだ」といったものではなかつたでしょうか。最近よく聞く「いつするか、今でしよう」という言葉はこの応用編といつてもいいのですが、その元ネタというものがありません。それは今から一六〇〇年ほど前の中国の詩人陶淵明の詩です。詩の題名は「雜詩十二首 其一」。よく知られているのは最後の部分です。

盛年不重来 盛年 重ねて来たらず
一日難再晨 一日 再び晨になり難し
及時当勉勵 時に及んで当に勉勵すべし
歲月不待人 歲月 人を待たず

若い時代は二度とは来ない／一日に二回の朝は訪れないだろう。／時を逃さず無駄に過ごすな／年月は人を待つて

くれないのだから

「勉強」という言葉が何となく「勉強」ということばと近い関係にあるように感じます。そのためか、この部分だけを読んでみると勉強に努め励めという意味にとれそうです。実際、多くの人たちがそのように解してきましたし、漢文に縁の薄い人たちだけでなく、専門家といえる人たちもそのようにとらえていたフシもあります。たとえば、十七世紀後半に紀州藩の藩儒であった榊原篁洲。大藩に召し抱えられた儒学者ですから当時の漢学者としては第一級の人物であったでしょう。この人物が漢詩文のアンソロジー「古文真宝」の中に収められた朱子（朱熹）の「勸学文」、つまり「学問のすすめ」という文章の解説の中で次のように書いています。文章が長く古語もわずらわしいので要約して現代語訳します。

学問する人は必ず勉強して寸陰のうつることを惜しまなくてはいけない。月日はすばやく流れていつて一瞬の間断もない。とやかくする間に老年となってしまう。このことは陶淵明の詩に『盛年不重来……歳月不待人』という詩の内容と同じである。

「古文真宝前集諺解大成」
一六八三年刊行による

榊原篁洲は日本独自である貞享曆をつくった渋川春海（安井算哲ともいいます）とも付き合いがあったというくらい幅広く

い教養にあふれた漢学者であったのですが、この人物も陶淵明の詩を「若いときには時間を惜しんで勉強に励め」という意味にどうやら取っていたようです。

では、「人生無根蒂」からはじまる「雑詩十二首 其一」での作者に真意は何でしょうか。

それには当然のことですが、詩の全体を見る必要があります。全部で十二句からなる詩の前半では、人の命は舞い上がる塵と同じで風のまにまにふきちらされていくもの、だから地に落ちればみな兄弟であり肉親かどうかにかかわる必要はない、と歌い上げます。それでは人の命がはかないのに何を「勉強」をするのか。詩の後半の最初でこう言っています。

得飲当作楽 斗酒聚比隣

書き下すと「飲を得なばまさに楽しみをなすべく、斗酒もて比隣をあつめん」となり、現代語訳すると「飲樂の時を得たら楽しむのが当然のこと、たくさん酒を用意して近所の人を集めて一緒に飲みまわろう」となります。この二句の後にあの「盛年不重来……歳月不待人」がくるわけです。

つまり「時に及んでまさに勉強すべし歳月は人を待たず」とは、時を逃さず楽しむときは徹底的に飲み騒ぎ楽しもう、歳月は人を待ってはくれないから、というもの。陶淵明はしっかりと勉強をしろ、とは決して言ってはいません。むしろ、

はかない人生であるだけにみんな酒を飲んで楽しめるときにはトコトン楽しめと言っているわけで「飲酒と飲樂のすすめ」といふべきものです。

他の人の詩文から自分にとって都合の良いところだけ取ってきて変な解釈をこじつけることを「断章取義」といいます。世間ではよく見かけることですし、かくいう筆者も身に覚えのあること。一知半解のそしりを受けぬように注意しなければなりません。

「歳月人を待たず」で青少年の尻をたたいて勉強させるのは詩の一部を取り出しているだけのことで、まだ罪が軽いといえます。これよりもズンと罪深いというか、もうペテンまがいといってもよい詩が戦前の（昭和の時代にも一部の）漢文教科書に堂々と載っていました。作者は朱子、つまり朱子学の祖である朱熹（一一三〇～一一二〇〇）です。詩の題名は「偶成」。明治の教科書編纂者によって「勸学」の詩、つまり青少年に対して学問に励めと叱咤激励する漢詩とされ、中等学校用の漢文教科書に載せられました。

二

では、まず詩の紹介から。短い詩ですから詩全体を一気に載せます。

偶成

少年易老学難成
一寸光陰不可輕

未覚池塘春草夢
階前梧葉已秋声

右の詩を書き下すと次のようになります。後の（ ）は現代語訳です。

少年老いやすく学なりがたし
一寸の光陰軽んずべからず
未だ覚めず池塘春草の夢
階前の梧葉已に秋声

青年時代はあっという間に過ぎて老人となってしまうが、学業はなかなか成就しない。少しの時間も軽んじてはならない。池の堤に萌え出る若草のような青年時代の夢がまだ覚めないうちに、階段の前の青桐の葉はもう秋風に吹かれて音を立てているから。

これを読めば多くの人が「ああ、聞いたことのある詩だ」思われることでしょう。明治三八年（一九〇五）には教科書に載っていたといえますから、ざっと九〇年近く、この詩は朱熹の書いた「偶成」とされてきた訳です。

しかし、この詩がすこぶる怪しげな詩だということはだいぶんと前から言われていました。なにしろ現在までに伝わっている朱熹の詩文集にはこの詩がまったくどこにも見当たりませんから。

「若いときはすぐに終わってしまう。だから、しっかりと勉強しろ」という内容の朱熹の詩は存在しませんが、先に述べたように朱熹の「勸学文」が「古文真

宝」にあります。短い文なのでここにあげてみます。

いふなかれ、今日学ばずとも来日ありと。いふなかれ今年学ばずとも来日ありと。日月は逝きぬ。我ともには延びず。ああ老いにけり。これ誰があやまりぞや。

「来日」とは「来たる日」のことで「明日」のこと。文の趣旨としては「少年老いやすく」と同じです。こうした文があるなら「少年老いやすく」の詩もありそうですが、繰り返しますが朱熹の詩文集には存在しません。

では、どこから「少年老いやすく」の詩は引かれてきたのでしょうか。

これについては二〇年ほど前から少しずつ解明されてきたのですが、朝倉和氏の研究によればこの詩の作者は観中中諦だろろうということです。

観中中諦（一三四二〜一四〇六）は十四世紀後半に活躍した禅宗の僧侶で義堂周信の指導を受け足利義満とも親しく相国寺第九世住持にまで至った高僧です。京都の五山の禅僧たちによって営まれた五山文学の最盛期の人と言ってよいだろうと思います。この観中中諦に次のような詩があります。

進学齊

少年易老学難成一寸光陰不可輕

枕上未醒芳草夢
階前梧葉已秋声

第三句（転句）の「枕上いまだ醒めず芳草の夢」の部分が「偶成」のそれとは違います。「枕上いまだ醒めず」とは枕の上にある頭の中はまだ醒めてはいない、という意味で布団の中でムニヤムニヤ寝ている様子です。「芳草」は「春草」と同じ意味で春の若草のこと。

また、「芳草夢」や「春草夢」は「文選」で最も有名な謝靈運の詩「池上の楼に登る」にある「池塘春草を生ず 園柳の鳴禽も変ず」から引いたものです。この謝靈運の詩は官界に残るか去るかの迷いから去るという決断へと移っていく心を自然の移ろいととも描いたものですが、詩の内容もさることながら「池塘春草を生ず」が名句として特に有名でした。

二つの詩に出てくる「夢」の語は「池塘春草」を謝靈運が夢の中で彼の弟と逢ったことからインスピレーションを得たという故事から出てきた語です。

筆者の意見を正直に言えば「池塘春草夢」という詩句は謝靈運のそれをそのまま使い、しかも漢詩人をめざす人なら誰でも知っていた「夢」のエピソードを盛り込むことなどは幼稚で拙い詩だといふはかありません。不世出の大学者ともいえる朱熹にはおおよそ似合わない詩といえます。

さて、さきほども書いたように五山文

学は鎌倉時代後半から室町時代全体を通じて営まれた文学活動です。頂点に立つのは世阿弥と同時期に活躍した義堂周信と絶海中津ですが、室町時代の後半となると詩として完成度の高い作品よりも、むしろ艶っぽい内容や諧謔を中心にした作品が目立つようになります。そうした詩を集めた詩文集が江戸時代初めに出されました。「滑稽詩文」がそれです。江戸

時代にかんがりの読者を得たらしいこの「滑稽詩文」には狂歌のような詩やかなりきわどい内容の詩が集められています。特に目を引くのは男色の詩。五山の禅宗寺院は完全な男だけの社会でした。そのため、稚児として寺に入った美少年が数多い僧侶たち（もちろん高僧たちも含めてです）の抑えきれぬ性欲の対象とされました。その代表作に「寄若衆（若衆に寄す）」という作品があります。内容はここでは紹介しにくいのですが、男色を表わす「衆道」という語が「若衆道」から成立した語であり、「若衆」という語そのものが美しい稚児を意味しており男性だけの世界にウツウツとしている僧侶たちの性愛の相手のことであると知れば、おのずと内容は理解できるでしょう。

もちろん五山だけがそうであつたわけではありません。天台宗の座主を擁した比叡山延暦寺などは「男色のメツカ」「男色の総本山」とされ、高僧たちが稚児愛に目の色を変えていたらしいのです。

「京都ざらい」の井上章一氏によれば今

日の僧侶が男色から女色に転じたのは近代以降とか。もともと近頃は祇園などの花街から僧侶の姿は消えつつあり若い女性に相手をしてもらえるキャバクラの方へと彼らの足は向かつていくという情報も井上氏の著作にはあります。真偽の程は保証しませんが、「坊主と姫」の組み合わせがそのあたりでは見かけるかもしれません。

脱線はさておいて、先ほど書名をあげた「滑稽詩文」の中に「寄小人」という詩が収められています。

寄小人

少年易老学難成一寸光陰不可輕
未覚池塘芳草夢
塔前梧葉已秋色

使われている漢字は「偶成」とほとんど同じですので、現代語訳は不要でしょうが、この詩が「男色のすすめ」だと理解するには若干の解説がいります。

題名の中にある「小人」は室町時代半ば以降の禅僧の詩文集の用例から見て「年の若い僧」を意味します。詩の冒頭にある「少年」とは「幼少にして出家し僧を目指している男児」であると同時に「僧侶の性愛の対象である稚児」という意味もあります。ここまで来ると「ははーん」とお分かりになると思いますが、「寄小人」は「君の相手をしている稚児

さんは老けやすいし、君の学業成就も難しい」、だから男色と学問の二つの道に若い今というときこそ時間を惜しんで励みなさい、という内容となります。若いときはひたすら男色と学問とに励めというのが、つまり性欲の全面的な解放と学問へのひたすらなる精進という二つのことの両立が実際に可能なかどうかは筆者には全く不明なのですが、それが滑稽ということであり、もともと観中中諦の詩のパロディーとして作られたものでしょうから、これ以上詮索するのは無用でしょう。

それにしても「少年老い易く」を最初に教科書に載せようと考えた人物はいったいどこをどうやってこの詩にたどり着いたのでしょうか。朱熹の詩文集をどんなにひっくり返しても「偶成」は出てきませんから、きちんと朱熹の著作を読んだ上で選んだとはとても考えられません。では、どういうルートでこの詩にたどり着いたのでしょうか。

もともと五山文学の漢詩は敬して遠ざけられる存在でした。現在でも日本古典文学研究者で五山文学が専門という方はほとんど見かけません。このことは江戸時代でも同様のことであったらしく、たとえば、江戸時代中期に書かれた「日本詩史」(明和八年(一七七二)刊)で著者である江村北海は五山の漢詩を「もとより論じ易からざるなり」と評しています。明和期最高の漢詩研究者であった北海に

とつても五山の詩は決して近いものではないなかつたようです。それだけではなく江村北海は「(五山の詩の多くは)辞はむつかしく、意は滞り、議論に涉り、諧謔(たわぶれごとやいつわりごと)をまじえ」ているとも書いています。五山文学の最高峰といえる義堂周信と絶海中津を除けば、その評価は低いといわざるを得ません。そのためでしょうか、筆者の見る限り江戸時代にあつて五山の詩が(禅宗の寺で修行中の禅僧を除いて)あちこちで盛んに読まれたという形跡はほとんどありません。日本の漢詩が最も盛んな時期であつた江戸時代であつたにもかかわらずです。

とすると、ここからはまったくの筆者の想像ですが、「少年老い易く」を引っ張り出した教科書編集者は原作者である観中中諦の作品をみたということはずなかつたのではあるまいか。もし、先人の作を見たとすれば「続群書類従」の収められていた「滑稽詩文」の方が可能性は大きいのではないのでしょうか。いや、そんな悪ふざけのようなことはするはずはないだろう。いやしくも教科書を編纂しようという人間が。

いや、ひよっとしたら江戸後期に大量に刊行された艶っぽい戯作本の内容が何となく編集者の心の中に残っていたのか……。それとも……。以下は省略です。これから先の推察はほとんど妄想の世界ですから、読者自身が自由に想像してみ

てください。

それにしてもです。陶淵明の詩の本来の内容とは真逆のことをいったり朱熹作の詩といつわたりたりして青少年を長年にわたつて指導してきたことは本当に罪作りなことをしたとしか筆者には思えないのですが、いかがでしょうか。

【補足】

五山文学をあれこれと述べたので、絶海中津の詩を一つ紹介します。昭和の漢学者神田喜一郎氏によると「わが国に漢詩あつて以来の絶唱」という評価を受けた詩です。詩の題名は「多景楼」。中津が十四世紀に明の江蘇省にいた頃の詩です。もとより詩の評価は読む人によって決まるもの。杜甫ポートルの詩といえどもつまらぬと感ずればそれまでのことです。自由にお読みください。最初に原文、次に訓読、そして、注釈をつけます。現代語訳はだらだらとしてわざわざわしいので省略します。勝手をして申し訳ありません。

多景楼

絶海中津

北固高楼擁梵宮

楼前風物古今同

千年城壘孫劉後

万里塩麻吳蜀通

京口雲開春樹緑

海門潮落夕陽空

英雄一去江山在

白髮殘僧立晚風

北固の高楼、梵宮を擁し、楼前の風物、

古今同じ千年の城壘、孫劉が後／万里、塩麻、吳蜀通ず／京口、雲開きて春樹緑に／海門、潮落ちて夕陽空し／英雄ひとたび去つて江山在り／白髮の殘僧、晚風に立つ

《注釈》

「北固」とは中国の江蘇省にある山の名前。「梵宮」は寺院。「壘」は大きく深い堀のこと。「孫劉」は三国志の英雄、呉の孫権と蜀の劉備。「吳蜀通」とは塩と麻を敵同士ながら交易したということ。「京口」は北固と同じ地にある街の名前。今は江蘇省鎮江市の一部である。昔は呉の地であつた。「雲開」は雲が切れて春の日差しが現れたこと。「英雄」は呉の孫権のこと。「海門」は海峡。「潮落」とは引き潮で海が干上がること。「殘僧」は取り残された僧のことで作者自身を指す。

海峡が干上がつて海の水を朱に染めることのできない夕日がいざに西の空に赤く懸かっている中で一人ボツンと立ち続ける老僧、つまり作者の姿が印象深いです。



邪馬台国と火の国（補足4）

満田 正賢

五、女王国の存在の文献的検証

(1) 漢書地理志の東鯤国について

漢書地理志第八の下にある東夷関連の記述の最後に「楽浪海中有倭人分爲百余国以歳時来献見云」という記述があります。一方同じく漢書地理志第八の下の呉地関連の記述の中に「会稽海外有東鯤人分爲二十余国以歳時来献見云」という記述があります。

火国は呉を祖地とみなしていた関係から会稽郡と交流していた可能性が高いと思われる。従って火国については漢書地理志に東鯤国として紹介されていた可能性があります。陳寿（又は帯方郡の郡吏は女王国を「会稽東治之東」と表現していますが、この表現は東鯤国の説明にまさるべきではないでしょうか。

「火国」は魏への朝貢が中国との初めての交流ではなく、その前から呉の地との交流が続いていた。その歴史の中で卑弥呼が「呉」と対立する「魏」との交流を望んだ。魏が下賜したとされる金印の「親魏倭王」の意味する所はそういうことだと思えます。

なお、漢書地理志の「楽浪海中有倭人分爲百余国以歳時来献見云」という倭人の記述は、当時倭人が朝鮮半島南部に存在していたと推定されていますので、楽浪郡と地続きであった朝鮮半島の倭人を

通じて認識した日本（九州）の倭人の存在と考えるべきものと思えます。

(2) 晋書によって推測できる火国から筑紫国への倭国代表の交代

三国志魏志倭人伝に記載された卑弥呼の時代（三世紀）と宋書に記載された倭の五王の時代（五世紀）を繋ぐ中国史料として晋書があります。晋朝は司馬炎（武帝）が魏から禅譲を受けて建立した西晋（首都洛陽）に始まり（二六五年）、西晋は漢の侵略を受けて滅亡します（三一六年）が、晋朝は南北朝時代の初代王朝・東晋（首都建康）として残り（三二七年）、四二〇年に南朝の次期王朝となる宋に禅譲されるまで続きます。まさしく魏志倭人伝と宋書を繋ぐ時代の中国正史です。

晋書が編纂された時期（六四六年—六四八年）は唐の太宗の時代であり、晋書は南北朝時代の梁、陳、北齊、周及び隋の編纂と同時に編纂されています。晋書の次の正史となる宋書はすでに宋が禅譲した南齊期に編纂されています。なぜ二百年以上も経て正史を編纂できるのか。

それは、それぞれの王朝期の行政文書が王朝別に保管されていたことよって可能となったと考えられます。まさに行政文書の編纂が正史編纂の基本作業でした。晋書についていえば、この編纂作業に二十一人が参加し、房玄齡以下三名が監修したと記録されています。また南朝すべてに王朝が禅譲により継承され南朝最後の王朝・陳も最後の皇帝・後主が隋に降

伏した為破壊は免れていることにより、南朝各王朝の行政文書は歴代王朝の記録を保存する朝廷書庫に無事保管されていたと考えられます。

なお晋書には晋朝期の行政文書の記載のほかに、行政文書以外の参考文献・献を転記したと思われる記載が見られます。ちなみに晋書列伝には四夷についての記載があり倭人の条がありますが、この内容は、魏志倭人伝の内容そのものです。

中国側の資料によって日本の古代の姿を把握する為に重要なのは晋朝期の行政文書の編纂をしたと思われる帝紀の記述です。

晋書・帝紀に東夷関係の記述は多く見られますが、その中で倭人（倭国）を記述していると思われる記述は以下の三か所です。（参考文献・晋書・中華書局版）
① 晋書卷三 帝紀第三 武帝 泰始二年（二六六年）西晋

泰始二年十一月己卯倭人来献方物

三国志・魏志倭人伝の記述の中で最後に記述された年代は正始八年（二四七年）です。この年に卑弥呼が狗奴国との不和を訴え、帯方郡は女王国に張政等を派遣し、卑弥呼が死去し、宗女壹与が王となり、掖邪狗等を帯方郡に派遣し方物を献上しています。

晋書の倭人の条では、魏志倭人伝の内容を集約して記載した上で「其女王、遣

使至帯方朝見其後貢招不絶及文帝作相又数至、泰始重驛入貢」と記述しています。

三国志・魏志倭人伝に記載されていた女王国と帝紀泰始二年（二六六年）に記載された倭人とは連続性を持つと考えて間違いはありません。

② 晋書卷三 帝紀第三 武帝 泰康十年（二八九年）西晋

太康十年十二月是歳東夷絶遠三十余国西南夷二十余国来献

同じ武帝紀の泰康十年（二八九年）については「東夷絶遠三十余国」という表現が倭国表現と似ていることからこの年に女王国が朝貢したとも考えられます。

しかし同じ武帝紀であるにも拘らず文面に倭人という表現が使われていないのは不自然ですので、この記述は倭人朝貢の証明にはならないと思われれます。

③ 晋書卷十 帝紀第十 安帝 義熙九年（四一三年）東晋

義熙九年十二月是歳高句麗倭国及西南夷銅鏡大師並献方物

義熙九年（四一三年）は泰始二年（二六六年）とは一四七年の隔たりがあります。しかも東晋の末期です。宋書の中で一番早い倭国の記載は永初二年（四二二年）の「高祖永初二年，詔曰：倭讚萬里修貢，遠誠宜甄，可賜除授」です。この記述とは八年しか離れていません。梁書

諸夷伝には、そのものずばり「晋安帝時、有倭王贇」という表現もありますが、義熙九年（四一三年）に来貢した倭国は、倭の五王・讚の国であり、筑紫国であることは間違いないでしょう。

私の見方では宋書に記載された倭の五王がいた国は筑紫国です。筑紫国は漢代に「漢委奴国王」の金印を下賜され、そのお札に生口百六十人を献じた「倭国王帥升」のいた国です。一方で、三国志・魏志倭人伝に記載された女王卑弥呼・壹与が統治していた国は火国です。晋代においても西晋武帝期二六六年の時点ではまだ火国との交流が続いていました。そして、義熙九年（四一三年）との一四七年の隔たりの間に、筑紫国が火国を制圧し、倭国の代表となつていことが推測できます。

(3) 宋書倭国伝と倭の五王

宋書は中国の南北朝期に西晋から禪譲を受けた宋の正史であり有名な 讚・珍・濟・興・武の倭の五王の来朝についての記事がある書物です。通説ではこの倭の五王は大和朝廷の各天皇に比定され、特に武については雄略天皇であることが間違いないとされています。それは日本書紀の雄略条に呉国との交流の記述があるからです。南朝は昔の呉の地であり「宋」が「呉」と記述されていることも不思議ではありません。雄略の条単独で考えれば倭王武と一致すると見做すことは出来ず。但し雄略の没年は四八九年ですが、

『梁書』武帝紀に中国南朝の梁が五〇二年に、王朝樹立に伴い倭王武を「征東大將軍」に進号したという記載があります。これがはたして雄略の死後全く交流のないまま儀礼的に行われた進号だったのかどうかという疑問は残ります。

しかし何よりも重要なのは、倭の五王はセットで考えなければならないということです。日本書紀には雄略以前の各天皇の条に呉国との交流記事がなく、宋書が記述した倭の五王の親子兄弟関係が大和朝廷の各天皇の親子兄弟関係と一致しない為、通説では最初に朝貢した讚について、応神なのか仁徳なのか履中なのか特定できないような状態なのです。これは当時の中国との交流の主体は大和朝廷であるという思い込みによって生じた誤りです。

倭の五王は宋に冊封されることを望んでいます。この意識は漢の時代に「漢委奴国王」の金印を下賜されお札に生口百六十人を献上した「倭王帥升」と同じ意識です。そう考えれば倭の五王は「倭王帥升」のいた筑紫の王であるとした方が素直に理解出来ます。

(4) 倭王武の上奏文

宋書倭国伝に倭王武の上奏文として「自昔祖禰 躬擐甲冑 跋涉山川 不遑寧處 東征毛人五十國 西服衆夷六十六國 渡平海北九十五國」という記述があります。不思議なのは「西服衆夷」という記述です。これはどの地域を指すのでしょ

うか。これが近畿以西または九州を指すのであれば「西征」と記述すれば良いはずですが。それを「西服衆夷」と書いたという事は「自分たちをとりまく西の地域」の征服であり筑紫国による火(肥)国の征服と考えるとピッタリ当てはまるのではないのでしょうか。

一方「海北九十五國」と記載された朝鮮半島の地域はどの程度の面積の地域でしょうか。宋の朝廷に対して、さすがに高句麗、百濟、新羅を平定していたとは言えないでしょう。仮に現在の大韓民国の全羅南道と全羅北道がそれにあたるとするとその面積は約二万キロ平方メートルです。ここに九五か国あったわけですから。一国の占める面積は約二〇〇キロ平方メートルです。この一国当たりの平均面積を使つて計算しますと西服「衆夷六十六國」の面積は約一三・八六〇キロ平方メートルとなります。現在の佐賀県、長崎県、熊本県の合計面積は一四・二七五キロ平方メートルですので、「衆夷六十六國」には肥国がほぼ匹敵します。又東征「毛人五十國」の面積は約一〇・五〇〇キロ平方メートルとなります。大分県と福岡県豊前地方の面積は約八・四七四キロ平方メートルですがこれに（筑紫国の王であったと推測されている）筑紫君磐井が統治していたと思われる山口県の面積を加えると一四・五八五キロ平方メートルとなり「毛人五十國」の面積を超えます。

要するに「渡平海北九十五國」を基準に考えた場合、倭王武の平定した地域はとうてい日本全体を表しているとは言えません。「東征毛人五十國 西服衆夷六十六國」という記述は、筑紫国が火国と豊国を平定したという記述であると考える方がつじつまが合うのです。

「毛人」という表現について補足しますと、通説では「毛人」は「蝦夷」や「毛野国」に比定されていますが、豊国にも三毛郡があり、後に上毛郡と下毛郡に分割されています。豊国の人々が筑紫国から毛人と呼ばれていた可能性はあると考えます。

(5) 南齊書による倭国の歴史の安易な結びつけ

南齊書は、晋書に続く中国正史であり倭の五王の記述のある宋書の、その又次の中国正史です。ここに卑弥呼と倭の五王とを関連付けた記述があります。

倭國、在帶方東南大海島中、漢末以來、立女王。土俗已見前史。建元元年、進新除使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓「慕韓」六國諸軍事【據南史補】、安東大將軍、倭王武號爲鎮東大將軍。

晋書四夷伝倭人条の記述内容は、魏志倭人伝の丸写しです。そして宋書倭国伝は倭国の過去の歴史には触れていません。この二書に対し南齊書の倭国関連の記述

編集後記

今年、天変地異の年です。地震、暴風雨、土砂崩れ、家の浸水等々。次から次と来る。台風どうなってしまうんでしょうか？

先月号に掲載しました、松田愛子さんの「憲法がかわれば人生が変わる」には反響がたくさんありました。松田さんは、店じまいの二か月ほど前に「芥川だより」を読まれて来店されました。芥川だよりを長く発行していますが、芥川だよりを読まれて来店され御注文を頂いたのは、松田さんが初めてでした。それほど「芥川だより」は宣伝媒体としてはダメということ。まあ、道楽と割り切ってはいますけど。

松田さんとお話をしたら、本当に奇跡的な出会いであることが分かりました。彼女の弟さんとは、須知高校の親しかつたクラスメートであり、松田さんのお母さんと私の母とは同じ村の出身で同級生でした。

母からも、高校の先生からも彼女は勉強ができると聞いていましたので、お出会いは時には驚きました。きつと、「芥川だより」を長く続けてきた「褒美に神様が取り計らってくれたのではないか」と思いました。その期待に応え、松田さんは素晴らしい文を書いて送っていただきました。

松田さんが書かれているように、あの時代、山奥の貧しい村から、女性が大学へ進学するのは並大抵ではなかったと思います。そのうえ、郷里に帰り地域活動に頑張っておられると聞き、誇るべき我が須知高校の先輩だと考えています。

商売の宣伝にはならなかった「芥川だより」もいろいろな出会いをたくさん作ってくれます。これからも、想像しない出会いが待っていると思います。

嘉

は極めて少ないものであり、とうてい倭国の歴史を直接調査したとは思えないものです。この南斉書の記述は極めて安易に三国志魏倭人伝の記述と倭王武をつなげて倭国の歴史を創作したものとしか思えません。

南斉の時代には卑弥呼のいた火国は舞台から消え、筑紫国の支配下に かれていきます。倭王武が卑弥呼は自分たちの王ではなかったといわない限りその関係はわかりません。しかし、宋書に記載された倭王武の上奏文には卑弥呼が自分たちの国の王であったという事は、いさい書かれていないのです。

困ったことに、南斉書による倭国の歴史の安易な結びつけはその後の隋書倭国伝などに引き継がれています。これは日本の古代史解明の障害の一つとなっています。

(完)

四月号から連続して「邪馬台国と火の国」三回、「邪馬台国と火の国(補足)」四回と計七回にわたって邪馬台国関連の稿を連載させていただきましたが、これでひとまず邪馬台国関連の連載は終了させていただきます。来月号からは邪馬台国があった三世紀以降近畿王朝が名実共に日本を支配する七世紀末までの日本の古代史に隠された歴史を、「隠された歴史」という題で、多少系統的な記述からは外れますが皆さんが興味をもちそうな題材を取り上げて思いつくまま綴りたいと思っていますのでよろしくお願います。

MEMO

水の歌 (その1)

身に巡るみずを揺すらせ身をのばす
次の世いかなるかたちのわれか

歌人・鈴木英子氏の歌である。水

をこのように歌う人がいることを知り驚いた。「我々はすべて、歩く水たまりである」とは、英国の生命科学者で動物学者であるライアル・ワトソンの言である。確かに成人の場合、人間の体のおよそ六十パーセントは「方円の器に従う」という水である。そうではあるがしかし、いったい誰が、このように水を歌い、「次の世のわれのかたち」に思いを致したであろうか。

この歌に出合ったとき、溶液中のイオンの振る舞いなどに関連して長く水に向き合い、次のように五七五の句に水を詠んだこともある私は不思議な縁を感じた。

- 一粒の水の巡礼地球旅
- 一滴の水の向こうに大宇宙
- 一滴の水に見果てぬ万華鏡
- 一滴の酒も涙も水の精
- ありふれた水に花咲く命咲く
- どこにでも水と平和はない地球
- 極微なる水がつながり海となる

極小の水つながれば海が鳴る

さて、命は水に包まれて生まれ、水は命を満たす。また、水の存在によって初めて、命は循環することができる。

命なきものと命をつなぐ水
万物と命をつなぐ水の精
水の輪のまんまるまるい命の輪
ありふれた水が命に満ちる星
ありふれた水に奇跡がありふれる
命の循環は、次のように詠うこともできる。

地のすべて命をつなぐ輪になって
命なきものと命が輪をつくる
終わらない命なくならない命
生きて逝く次の命の始まりに
つなぐ手と手が新しい命生む
万物が和して命の揺りかごに
命なきものと命の地球の和
命みな地球に生きる大家族

さまざまに思いを巡らせながら、この歌人の二つの歌集から「水の歌」を拾ってみた。まず、『鈴木英子集』(セレクション歌人@、邑書林、二〇〇五年)よりの抄出。

水無月になしき水を湛えおり

家族をつつむ東京の水

樹は風によりそうあわれ水薫る
家族へわれもやさしく還る
進化せし脳をつつみてみどりこの
頭にまだやわきひとところあり
身のうちをゆるく流るる川底に
石・ひと・椿 眺めていたり
木と魚がこころを東の間とりかえて
みずみずあそぶ今昔遊ばな
みずけぶる街にからだの滲みたり
われがみずなるかの日疚しき
魚の死を流れてきたるみずを引き
ひとり脂を拭いておりぬ
生れ出づる前の世恋しと泣く子かも
ともにゆきたやみずのさきの世
セイウチが牙を垂らして水のなき
博物館に安泰におり
水は揺れ、立ち上がりおのれ打ち
ながらみずにあたり 東京の水
水から来てみずへうたえる子守歌
夜を照るわれのふたりご真水
ヒロシマのナガサキのいろを
攫いたるように緑酒の一瓶古りぬ
このみずと心中すれば溺死とや
遠くへゆこう一緒にゆこう

俳句

土田 裕

孔子像笑まふとも見え秋麗
(湯島聖堂)

秋雲のなびきて親し駿河台

秋の声スカイツリーの高きより

至福これ旅の味わひ新走り

天高しゆるゆる回る観覧車

影山 武司

藍深き海の吸ひ込む秋気かな

航跡に鷗の群る秋日和

天高し半島を鳶の越えゆけり

閨の窓

開けてちちろの部屋となり

千年の社の千木の秋日かな

寺町の書肆の薨や居待月

白萩の零るる寺の大法会

山門の躡り口めき酔芙蓉

辻曲がり風に荻田の匂ひかな

底紅の底にひと日の風を溜む

もう一冊の歌集、『月光葬』(鈴木英子、KADOKAWA、二〇一四年)への道草は次回にしよう。